



長き昼寝日ざしつるつるしてきたる 矢島 惠  
 天界に還らむと滝落ちにけり 佐藤 健  
 山蟻の列に鎖の微音ふと 大野今朝子  
 抽斗に妻の恋文群青忌 鈴木湖愁  
 子の握る青梅小さき地球かな 佐藤きく  
 極限の果ての凡庸ダリア咲く 高松正明  
 断崖に夕日のぬめり青岬 塩原英子  
 粘りこそ大地の力大豆蒔く 河西 将  
 遅しき鯉のくちびる夏の天 安部克詠  
 黒南風や巴里に兵器見本市 日高礼子  
 郭公や闇に目のきく仏たち 菅原砂登子  
 空蟬の現し身よりも力みをり 小林 武  
 七月や水平線は母の愛 丸山貴史  
 日の沖や婆娑羅の雷を五ッ六ッ 松本よし乃

\*

けふ何故かうれし胡瓜の尻の花 玉木愛子  
 沖繩忌人は波光となりしかな 高橋洋子  
 空蟬の風に賺され竟の声 中岡草人  
 かはほりや焼かねば焼かねばと日記 小林春代  
 日雷人の本棚見て愉し 宮坂やよい  
 梅雨蝸かなしみの千々降るやうな 原田宏子  
 踏みはづす人生もよし滝激し 唐澤南海子  
 雲の峰叫びて氣持立て直す 真弓ぼたん  
 だはんこく舟宥めつつがんぜ漁 許勢元貞  
 若さとはつねに宙吊り花胡桃 鎌田文子  
 かしこみて秋の出雲の奉書焼 三浦土火  
 夏草を刈れば老婆の匂ひかな 岸元忠義  
 糍飯に一日暮れたり梅雨夕焼 西川房子  
 蓮の花百数へれば阿弥陀仏 那須野次則  
 さくらんぼ小さく前へならえして 矢部正之  
 団扇にはさみしき音が付けてある 倉科繁登

# 岳俳句・拓くことば 九月

(445)

宮坂 静生

○これはおもしろいと気付いたならば、それをことばでいく分強調し、こんな言い方がいいのかなと思うように表現すること。

滝の句は古典的な句材、どこに新味を出すか

天界てんがいに還かえらむと滝たき落ちおちにけり 佐藤 健

大量の水が落下する。それが逆にもう一度天上に戻りたいとの思いを持って落ちるのだと、滝の深意を想像したもの。なかなかそこまでの想像は常人では気付かない。水が蒸発し天上に戻るとの思い付きではない。滝を擬人化した無常感のような思いではないか。「還らむ」という表現も仏教を踏まえた暗示的ないい方である。あまりむずかしいことをいわずに、落下した水が救われたいと思ったとの発想がいい。

山蟻やまありの列れつに鎖くさりの微音ひおんふと 大野今朝子

蟻が囚人のように鎖で足をしばられて連行されていく光景を想像したものか、眼には見えないが「鎖」の存在を思ったようだ。鋭い。「かちやかちや」とかすかな音がきこえるものか。自然の蟻から、たとえばアウシュヴィッツの強制収容所へ連れていかれるユダヤ人のさまなど社会的な事項を暗示

極限きょくげんの果はての凡庸ぼんようダリア咲く 高松 正明

あれこれ思いめぐらしたけれど、いゝ着想には行きつかないで、いささかの疲労の果てに「ダリア咲く」平凡な光景に目を止め、気持が落ちついたという。この一句生成の過程は私の作句状況と似ていると共感した。一生懸命の作者だ。なにか対象を決めて写生するやり方と、心中の思いをあれこれ考えるやり方と、大きく二つ作句方法がある。この二つのやり方をとるとき使い分けてみるのも、行き詰らないために必要なことである。

断崖たんがいに夕日ゆうひのぬめり青岬あおみさき 塩原 英子

夏の岬の夕方。断崖につるつるした夕日が当たっている。そ

## 今月の秀句

長きなが昼寝ひるね日ひびしつるつるしてきたる 矢島 惠

夕方近い夏の日ざしを「つるつる」と捉えた体感が見事。昼の〈ざらざらした〉感じとは違う。日ざしの力が弱まり、のっぺりし出した感じがよくわかる。そればかりではない、いく分齡をとったかなという抽象的な老人感も働いているものか。つねに自分の感性を一步踏み込んで表現する作者の意欲的な姿勢に感心している。才媛の一人。

し、関心が広いことから、一句に幅が生まれる。暗示力がある。現代の俳句には「社会化された私」という視点がないと句は薄っぺらになる。大事なところ。

抽斗ちゅうたしに妻つまの恋こい文群ぶんぐん青忌せいじよ 鈴木 湖愁

亡き妻詠。妻の抽斗に恋文がある。たとえば私がまだ妻と恋愛中だった頃のラブレターがきちんと保管されていた。これは泣ける発見だ。その妻がもういなくなり、私がひとり残された。残酷な現実。「群青忌」は水原秋櫻子忌。句集『葛飾』で抒情句の世界を拓いた俳人を配したものだ、なぜ秋櫻子忌なのか。そこがもうひとつ、やゝ曖昧だ。私は上のフレーズには忌の句にしない方がいいと思う。さて何がいいか。

子この握にぎる青梅あおうめ小ちさき地球ちきゅうかな 佐藤 きく

青梅が「小さき地球」だと見たのは、素人っぽい方がいい。その形からの着想であろう。青梅と地球を対比してみると、地球の内部と青梅の種の状態など単純な類似が思われ、地球を身近にひきつけたいい方に教えられるところがある。ぐいぐいと怖いもの知らずのたくましさ若手の現代俳人だ。この調子でいきましょう。

れを「ぬめり」と見た。先掲の矢島惠俳句の昼寝から醒め、日ざしを「つるつる」と感じた捉え方と共通している。老練な見方である。土に根ざした俳人でないと気付かない。

粘りねりこそ大地ちがちの力ちから大豆あず蒔まく 河西 将

大地の土の粘りのことであろうが、どこか人間の根氣を指しているようにも受けとれる。「大豆蒔く」ちまました作業は農作業の中でも根氣くらべの一面がある。どんなとき、どんなところでも「粘り」が仕事の核心だ。続ける。あきらめない。結果ではなく、途中の過程を大事にする。

遅たぐましき鯉こいのくちびる夏なつの天てん 安部 克詠

「夏の天」への飛躍が珍しい。町中の河川や池沼などに飼われている鯉の旺盛な食欲が「遅しき鯉のくちびる」に表現されている。その焦点を一気に大景、炎暑の天を配し、スケールの大きな句にする。強引ともいえる力強い一句となった。かならずしも最良の下五ではない。が、大柄の句になった。

黒南風くろなまかぜや巴里パリに兵器へいぎ見本市みほんいち 日高 礼子

大胆な話題作。梅雨時の鬱陶しい南風に軍需産業の中核をぶつけたもの。巴里は名高い芸術の都。そこで「兵器見本市」が開かれるという。意欲的な社会詠として、作者の取り合わせ手法にはたしかに迫力がある。

郭公かつこうや闇やみに目めのきく仏ほとけたち 菅原砂登子

拓くことば ② 自句寸言(4) 「人灼けて」

人灼けて行けど兵舎の趾地響かず 昭和31年

「龍膽」(第八十二号・昭和三十一年八・九月号) 特別作品「兵舎跡」十三句中の一句。「旧松本五十連隊跡にて詠める。兵舎依然として残り一部信州大学学舎学寮にかわる」と前書。原句「兵舎の地は響かず」。「趾地」と句集収録時に加倉井秋を添削してくださる。

私はこの年四月、信州大学文学部に入學した。学部のキャンパスは旧制松本高等学校跡地、あがたの森である。そこで四年間過ごすことになる。大学本部は旭町キャンパスにある。旭町の地は、明治四十一年に兵営が決まって以来敗戦の日まで、旧松本五十連隊があったところ。松本陸軍病院は国立松本病院と改称されたが、ヒマラヤ杉が覆いかぶさる国道脇の玄関口は暗かった。

昭和三十三年七月、信大附属病院新棟(北病棟)の第一期工事の落成式が行われるまでは荒涼としていた。荒野であった。戦争がなんであるかを掴みかけていた時期で、感動して詩情を得た句ではない。後年、信州大学の教官になった私が初めて研究室を持ったのは、最後まで残された五十連隊の管理棟の一角、副連隊長の部屋であった。春には、真っ赤な紅梅が窓から見えた。

「蠅や学舎に残る鉄格子」も同時の作。句集『青胡桃』所収。

鱒ぎし血の手を雪の中に揉む 昭和31年

「龍膽」(第八十四号・昭和三十一年十一月・十二月号) 特別作品「魚屋の歳晩」十四句中の一句。父が得意先へ鮮魚の行商をする日が続いた。歳晩はとくに忙しく、二貫目もある大鱒を何本も卸して配達する。包丁さばきが見事であった。雪もよく降った。温い湯を使ったが、間に合わない。鱒の血に染まった手を雪の中で拭いた。父は明治四十年生まれ、四十九歳の頃でまだ若く、元気な時であった。助手は母まかせ、私はまともな手伝いをしていない。今になると慙愧の思いに押し潰されそうである。句集『青胡桃』所収。

学費滞納唇つけ食らふ幹の雪 昭和32年

「龍膽」(第八十五号・昭和三十二年一月号) 雑詠。「ドン・キホーテに道化て疲る夜の炭火」も同時の作。「どこかふてぶてしく、虚無的な現代学生の姿が描き出されている。上五と中七下五とのモンタージュはなかなか見事」(雑詠選後・藤岡筑邨)とある。大学への学費はしばしば滞納した。あまり飲まず、本を買った。老舗の古書肆ヤマトヤや松信堂書店へはほとんど毎日通った。

自画像ではないが、これくらいの虚無感に憧れた。友人に洪澤龍彦の心酔者杉田聡(花藻群三)がいた。彼をモデルにしたように思う。早熟で才人。斬新な怪異があった小説を書いていた。句集『青胡桃』所収。

早朝か、あるいは夕方か。郭公とあれば夜分は無理。暗闇の中でも眼の光る仏像を配し、昼でも夜でもない、微妙な短い時間帯を的確に捉えた意欲作と思う。

空蟬の現し身よりも力みをり 小林 武

蟬よりも空蟬に力あり。一つの見方である。蟬のみずみずしさに対し、空蟬の空虚な力みを描き出す。ふつうに見るならば実体がある蟬と蟬殻との対比は比較の対象にはならない。しかし、この対比が成り立つところに詩情を感じる。

七月や水平線は母の愛 丸山 貴史

真夏の紺碧な水平線に無限なる「母の愛」を感じる。捉えようのない拡がりをも母の愛と人間味ある情緒で捉え直したところが意欲的だ。作者の作句力がこの一句でぐっと高まった気がする。水平線という対象を、写真とは違う、体から発した柔らかな抽象語でまとめた着想が新鮮だ。

日の沖や婆娑羅の雷を五ツ六ツ 松本よし乃

日雷が突然に五つ六つごろごろときた。まさに真夏そのものの景。「婆娑羅」はいかにも大げさに、派手に。あっけらかんとした眼前の景色をねんごろに捉えた力量に感心した。

雪嶺集・前山集から次の句も推薦候補作にメモをした。  
隠し子の有りや無しやと春の忌に 住 斗南子  
稜線の押寄せてくる冷素麵 海野 恵子  
海中に根を張る磯天草採 原 あや

いつ見ても旅の途にあり蝸牛 滝澤 あや

些細なものの発見——胡瓜の尻の花

けふ何故かうれし胡瓜の尻の花 玉木 愛子

身辺の些細なものの発見が一日私を明るくする。なぜかうれしい。畑で穫れた胡瓜の尻に花殻が残っている。立派に花の形をとどめながら、胡瓜は結構大きい。たわいないことに気持がぱっと晴れる。ひとの気持のふしぎ。現代人ほど、理屈ではなく、フィーリングで気持が明るくなったたりふさいだりする。軽い句であるが、気分を巧みに掬い上げた句に注目した。俳歴の長い中国路の作者。元氣なのがうれしい。

沖繩忌人は波光となりしかな 高橋 洋子

沖繩忌は六月二十三日。沖繩戦終結の日である。慰霊の日として昭和四十九年(一九七四)十月に県条例により制定された。戦没者二十三万余といわれる。「人は波光」となった。糸満市摩文仁の海をみると、亡き人はみんな沖繩のきらめく波になったと思う以外、かなしみの癒しようがない。戦争のない戦後七十年は「波光」のおかげなのである。

空蟬の風に賺され竟の声 中岡 草人

蟬の抜殻であるはずの空蟬が風に巧みにのせられ、あるはずのない最後のひと声をあげたという。ふしぎといえればふしぎな一句。蟬があれだけ盛んに鳴けば、空蟬にもわずかに蟬

の声が残っていたものか。(あー！) (ひー！) とも、風の音とも受けとれる声をあげた。それがぎりぎり最後の声だとは、なんとかなしい句か。作者草人さんは視覚不自由。それだけに第六感(勘)は鋭い。そこに八十七歳の人生の智慧が加わる。半生の秀吟の一句ではないか。大阪の長老の傑作。

かはほりや焼かねば焼かねばと日記 小林 春代

誰にも見せたくない日記。愚痴・怨恨・悔恨・痴情etc.の羅列。日記こそ日ごろの憂さの捨てどころ。あゝいやだ、破ってしまいたい、焼きたい。と思いついて、つい、ずるずると無為の日をかさねて。こうもりが飛び交う夏の日暮になると、いっそう気持があせるばかりというのであろう。実感のある句が巧みな作者。句は自在でユニーク。

梅雨蝸かなしみの千々降るやうな 原田 宏子

最愛の夫を亡くしたとうかがい、哀悼の思いを捧げながら一文を書いている。梅雨どきの、季節を先取りした蝸の声を耳にしなが、かなしくてならない。「千々降るやうな」とは心の隙を埋め尽くすようなかなしみの表現。気性のしつかりした作者だけに、むせび泣きをじっと堪えている句である。

踏みはづす人生もよし滝激し 唐澤南海子

滝詠であるが、折から気になっている若者への激励を托した作。くよくよしないがいい。長い人生、常軌を逸しても、それも人生。体当りでおやり。かならず道は拓けるもの。大

枯草を刈ればはおもしろみなし。「夏草」刈りにはむんむんたる精気みちた、しかし、どこかに蒸れた匂いがある。それを「若者」ではなく「老婆」の匂いとみた。意外性あり、再読すると、大いに納得する。現代は「老婆の匂い」も枯草や秋草が発する匂いではない。真夏の草の匂い。ういしく力あり。いろいろ想像が広がる。

糶飯に一日暮れたり梅雨夕焼 西川 房子

「糶」は混ぜる意。米不足のときに麦、豆類、大根ほか、なんでも混ぜて炊き上げた飯。梅雨の夕焼したたる中、混ぜご飯にかかずらい、いささか無為の日をすごしたという。戦中戦後の体験も重ねて思い描いたものか。老いの気分も感じられる老練な作。

### 今月の秀句

日雷人の本棚見て愉し 宮坂やよい

本好きの作者。ひとがどんな蔵書を持っているのか、本棚を見るのは愉しい。あ、この本、私もある。こんな本を読んでいたのかetc.と、本を通して、その人の読書傾向を想像する。珍しい本を見るところがやましい。逆に、あの本はない、私はあると、妙な競争心をひそかに抱くのも、勝手な愉しさ。日中のゴロゴロは昂揚感をあおる伴奏のようなもの。お洒落な作。

胆な意欲作。チマチマしないでぐいぐいと作る。上々。

雲の峰叫びて氣持立て直す 真弓ぼたん

熊本地震にやられ、立ち直りつゝある作者。その真情の一句。「叫びて」に力が入る。声援のみで申しわけないが、阿蘇の雲の峰へ向って、深々と声援を送る。

だはんこく舟宥めつつがんぜ漁 許勢 元貞

北海道方言「だはんこく」(駄々を捏ねること)を用い、「がんぜ漁」(エゾバフンウニ漁。古称「がぜ」「かせ」からの称とか)も北海道から北東北の地域語を生かす。海胆漁の舟が思うようにあやつれない苦労を捉えた実感の一句。地域色が滲む。毎月新しさへの挑戦がいい。

若さととはつねに宙吊り花胡桃 鎌田 文子

近頃、北海道在住の作者の力詠が光る。若さを詠い、至言。胡桃の花は宙に垂れる黒みがかった紐状の逸品。若さの活動の場は宙。自由自在。体操選手の演技のごとし。

かしこみて秋の出雲の奉書焼 三浦 土火

秋の出雲でうやうやくしく「奉書焼」を頂戴した。出雲は古来出雲族の大神が鎮座する地。他国人は出雲の地では平身低頭、かしこまらざるを得ない。飄逸な作。作者は隠岐の産。

夏草を刈れば老婆の匂ひかな 岸元 忠義

蓮の花百数へれば阿弥陀仏 那須野次則  
寺の満開時の蓮の花をみて、本堂の阿弥陀仏を拝したものが。淡々と詠い、究極は阿弥陀如来にひたすら帰依したいという願望のような作。小諸在住の長い俳歴の作者。信心が滲む専一の作。

さくらんぼ小さく前へならえして 矢部 正之

さくらんぼの箱の中で大粒のさくらんぼが並んでいるさまを捉えたもの。さくらんぼで切って読むと、児童が前へならえをしている小学校の校庭風景とも受けとれる。どちらの鑑賞がおもしろいか。わたしは後者。

団扇にはさみしき音が付けてある 倉科 繁登

団扇のバタバタあるいはハタハタ、音をたてて煽ぐ光景を、山頭火や放哉ばりに「音が付けてある」と詠ったもの。「付けてある」は「付いてある」ではない。いく分川柳調の「ひねり」を入れたもの。

次に岳集推薦候補作を掲げておく。

地を撫づる風捉へては梅雨草	丸山 靖子
父の日は水の匂ひのすることよ	新野 加代
青田波白鷺の立つ大和かな	福島 米雄
茶を注ぐ音の明るき帰省かな	瀬戸 柚月
母の死の父は小さし合歓の花	田中 薫
青年よ悩めよ悩め今日は夏至	西澤よし子